

令和 2 年 5 月 21 日現在

機関番号：15201

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2016～2019

課題番号：16K03157

研究課題名（和文）青銅器からみた古墳時代の器物生産構造と社会 - 量産技術と指向性の分析から -

研究課題名（英文）Structure of producing Bronze items with the society in Kofun period ; from the analysis of mass production technology and directivity

研究代表者

岩本 崇 (Iwamoto, Takashi)

島根大学・学術研究院人文社会科学系・准教授

研究者番号：90514290

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、古墳時代倭鏡の様式的な把握により、その全体像を3つの様式に整理し、それらの様式変化と同期して倭鏡以外の青銅器にも変化がみとめられることから、倭鏡とほかの青銅器がある程度関連性をもちつつ生産された可能性を明らかにした。重要であるのは、製作技術上の大きな変化から、様式の展開背景に工人・工房といった生産組織の改変を想定でき、それが青銅器にとどまらない金属器生産にみる技術革新とも連動すると評価しうる点である。

そのいっぽう、上記した日本列島産の青銅器にたいし、「同範」技法と規格共有が顕著な三角縁神獣鏡は、まったく異なる量産技術のもとで製作された点を強調できるようになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

古墳出土青銅器を対象として製作技法に着目しつつ、総合的な把握を試みた点に本研究の学術的意義はある。研究を進めた結果、先行研究でみのがされていた古墳出土青銅器の様式的な特徴を把握できるようになった。また、技術的な特徴に着目したことによって、工人・工房を系統的にとらえるようになったことはもちろん、定期的な検討を加味することによって工人・工房といった生産組織の再編などといった変化を具体的に論じうるようになった。

こうした製作者や生産組織の特質に迫る視点を導入することによって、青銅器生産を支えた社会組織について議論しうるようになり、実証的な検討をふまえた歴史像の復元が可能になることが期待されよう。

研究成果の概要（英文）：In this research, it was clarified by grasping the style that the Kofun period Japanese mirror can be arranged into three styles. In addition, it was also clarified that the change in the style of the Kofun period Japanese mirror mirrors that of other bronze products. In particular, it is important to assume that the production organization such as workers and workshops can be changed in the background of the development of the style due to the large change in the production technology, and it can be evaluated that it will be linked with the technological innovation seen in the production of metalware beyond bronze ware.

On the other hand, in contrast to the bronze ware made in Japan, triangular-rimmed mirrors displaying divinities and animals motifs has become possible to emphasize that it was produced under a completely different mass production technique.

研究分野：考古学

キーワード：古墳時代 青銅器 倭鏡 三角縁神獣鏡 復古再生 伝世 量産技術 製作技法

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

**青銅器がもつ社会的意義** 日本列島における青銅器の受容は、古墳時代に先行する弥生時代にはじまる。その契機は、東アジアにおける対外交渉の活発化にあり、製品の搬入だけでなく製作技術を体系的に導入することによって、まもなく列島でも生産が始動する。弥生時代の青銅器には、地域ごとの相違がみられ、列島各地での生産を想定しうる点が特色でもある。

そうした弥生時代青銅器の地域性は、古墳時代に至ると影を潜める一方、品目としては多岐にわたる青銅器が大型古墳を中心として列島各地に築造された首長墓に共通して副葬されるようになる。古墳という象徴的なモニュメントの汎列島の出現と、古墳時代青銅器の広域波及に相関性がうかがわれる点は、古墳時代の社会とこの時期の新たな青銅器生産体制の成立が不可分な関係であった可能性を示す。さらに、青銅器の生産と墳墓への副葬が古墳時代を通じて継続する点は、当該期の大きな特色でもある。それゆえ、青銅器の生産・流通・使用・消費(副葬)に至るまでのメカニズムと諸過程の実態に迫ることは、古墳時代社会の構造や特質を考究する際の重要な手がかりとなるばかりか、器物と社会の形成・維持との関連性を歴史的に捉える際にも有効な材料となりうる。青銅器の受容実態を解明することは、古墳時代社会あるいは日本古代社会を理解するうえで、きわめて大きな意義があるといえるのである。

**研究の今日的課題と経緯** 上述したように、古墳時代青銅器の生産・流通・使用・消費(副葬)の実態解明が果たす学術的意義は甚大であるにもかかわらず、これを個々の製品だけではなく品目の差を超えて総体として明らかにしようとする研究は少ない。それはひとえに、先行する弥生時代とは異なって、生産地が明らかとなっていないという点が大きく関係していると理解する。そうしたなかであって、生産から副葬に至るまでの過程の研究がもっとも進展しているのは銅鏡である。銅鏡の研究が深まった背景には、古墳時代社会の成立がその生産・副葬と不可分であるとする定説〔小林 1955〕によるところが大きく、近年に至るまで生産面における多様な実態が浮き彫りとされてきた〔福永 1991、車崎 1994、立木 1994、森下 1991・1998・2007・2011、上野 2000・2007、下垣 2003、辻田 2007、岩本 2008・2010・2015 など〕。また、流通や副葬といった側面についての検討も蓄積されつつある〔今尾 1989、藤田 1993、福永 1995、辻田 2001・2007、下垣 2012、上野 2014 ほか、岩本 2004・2010a・2010b・2014a・2014b など〕。銅鏡以外の青銅器では、銅鏃〔高田 1996〕や筒形銅器〔細川 2010〕、巴形銅器〔土屋 2013〕、銅釧についての研究を、研究代表者も製作技術という観点からこれまでに進めてきた〔岩本 2006・2013a・2013b・2014c など〕。それでもなお、生産の様相の明らかでない青銅器は多く、何より「青銅器という器物の全体像」の把握は困難な状況にあった。

これまで研究代表者は、いくつかの青銅器について製作技術を中心に検討を重ねてきたなかで、古墳時代青銅器を総括的に把握しようとした研究がきわめて低調な現状においては、何よりその全体像の把握が必要であると認識していた。とくに、古墳時代青銅器が維持された社会背景に迫るには、まず生産面の解明を目的とした総括的な分析を進める必要があった。そこで本研究では、青銅器の生産から消費に至る過程を解明する第一段階として、古墳時代青銅器の全般を対象として、技術と製作指向性の通時的な検討から、生産面にみる特質に迫ることをめざした。

### 2. 研究の目的

本研究の最大の目的は、青銅器が社会に受容・維持された社会的背景に迫ることにある。そこで、この目的を遂行するための第一段階として、青銅器の生産面という器物のライフサイクルの一過程に焦点をしばり、古墳時代を通じての青銅器生産の展開過程を明らかにすることとした。具体的には以下の3本のサブテーマを掲げて、これら論題の解明をもとに研究を実施することとした。

(1) 古墳時代青銅器の量産技術 青銅器の量産技術は、同一製品の製作を目的とした技法として、同一の鋳型を連続使用する「同範」技法と、同一の原型から複数の鋳型を製作する「同型」技法に大別できる。まずは、同一製品の製作にかかわる量産技術について、製品の観察から技法の整理をおこない、「同範」・「同型」技法の時期的・系統的な展開を明らかにする。さらに、量産技術には鋳型製作技術として割付技法がある。そこで、同心円分割技法や平面分割技法(四分割や六分割技法)といった割付技法の内容と製品との関係を整理する。そのうえで、中国大陸や韓半島の青銅器との比較もふまえて、古墳出土青銅器の量産技術とその展開を通時的に分析する。

(2) 古墳時代青銅器のデザイン系譜と製作の基層 古墳時代青銅器の各種品目のデザインは多様である。そうした多様なデザインは、先行する時期の青銅器を模倣したものもあれば、貝製品や鉄製品など別の材質の器物から青銅器に材質転換をはかることで製作したものもある。こうしたことから、古墳時代の各種青銅器のデザインの系譜を明らかにするため、技術や製作系統、細部の意匠にかんしての連続性・非連続性を整理しながら、その始原から終焉までの時期的な検討をおこなうことで、製作の基層の実態を探る。古墳出土青銅器の製作が、どのような連続性や画期のもとに推移・展開し、その背景にはいかなる指向性や社会事情を想定しうるのかを考察する。

(3) 古墳時代青銅器の製作技術と指向性 上述の量産技術とデザインの検討をもとに、各種青銅器の品目や製作系統についての分析を実施するとともに、本研究に先立って実施した研磨技術についての研究成果もふまえ、青銅器生産の展開と画期を明らかにする。そして、東アジア諸地域の青銅器生産という広域的視点のもとより、古墳時代に先行する青銅器やそのほかの器

物の製作動向、古墳築造の展開と画期といった側面も視野に入れながら、古墳時代青銅器の生産の展開と画期の背景を考察する。あわせて古墳時代青銅器がいかなる基層概念のもとに製作されて画期をむかえたのか、その生産システムを維持しえたのかについて議論を試みる。

### 3. 研究の方法

本研究では、古墳時代における青銅器生産を通時的に把握するため、もっとも長期にわたって日本列島において製作されたことを確実視できる倭鏡に着目した。すなわち、古墳時代における倭鏡生産の展開を把握し、これを基軸として古墳時代における青銅器生産の特質に迫ることとした。そこで、倭鏡を様式的に把握する視点として、(1) 量産技術としての鑄型製作技法と割付方式の異同にもとづく大別分類をおこなうとともに、(2) デザイン系譜と製作の基層の差が反映される連動的な倭鏡系列の盛衰に着目しつつ整理を試みた。

そのうえで、倭鏡以外の古墳出土青銅器の出現・変化・消滅や、各種青銅器の鑄型製作技法と割付方式の異同も考慮しつつ、倭鏡の様式的な展開といかに対応するかを検討し、古墳時代青銅器を総体として様式的に把握する方法を確立した。

さらに、(3) 古墳時代青銅器の製作技術と指向性について、東アジア的な視点から議論をおこなうため、三角縁神獸鏡の量産技術の展開過程について復元を試みた。そこでは、「同範」・「同型」技法の推移、製品規格がいかに創出・維持され、崩壊していったのかを明らかにするため、三角縁神獸鏡の相対編年を再構築するとともに、その相対編年上に暦年代を付与するための作業を進めた。具体的には、中国大陸で出土する魏晋代の華北系鏡群の相対年代を確立し、そこに年号鏡や中国で確認されている紀年銘資料を参照して暦年代を付与し、同一の単位文様を採用する華北系鏡群と三角縁神獸鏡から両者の併行関係を整理することで三角縁神獸鏡の暦年代を推定した。

さらに、以上の分析を総合化することによって、古墳出土青銅器の生産構造の変化と古墳時代社会の展開にみる特質に迫った。

### 4. 研究成果

本研究課題の成果を端的にまとめると、以下の7点に整理することができる。

古墳時代倭鏡の全体像について、製作技術の変化を考慮することによって新たな観点から3つの様式として把握しうるとする理解を示した。

具体的には、銅鏡製作技術の根幹をなす鑄型成形技法の差から、倭鏡全体を群と群に大別し(図1) おおまかに群から群へと時期的に推移することを明らかにした。さらに、時期的に連動して出現する系列群を抽出することによって、古墳時代倭鏡に「前期倭鏡」・「中期倭鏡」・「後期倭鏡」の3つの様式を把握した。

これら倭鏡諸様式の展開は、銅鏡にとどまらず、そのほかの品目を含めた青銅器生産の動向をもダイレクトに反映したものであり、その背景には倭王権構造の変化が垣間見えることを器物の保有形態の変化からも読み取ることが可能であると指摘した。

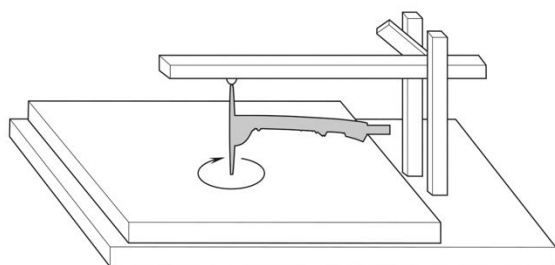
これは、技術的な視点から、中期倭鏡の成立に関係する青銅器として巴形銅器や銅釧をとらえること、後期倭鏡の展開に関連する青銅器として鑄造馬具や鈴付製品を位置づけることを示し、古墳出土青銅器を総合的に把握する方法を示した。古墳出土青銅器の変化の一つのあり方として復古再生があり、それが器物の保有状況の変化とも対応することを明らかにした。

具体例としては、倭鏡における後期倭鏡の出現背景として、前期古墳副葬鏡群をモデルとした点、古墳時代における巴形銅器や銅釧の出現が弥生青銅器の模倣よるものである可能性を考えうる点などをあげうる。なお、後期倭鏡の成立時期に、そのモデルとなった「伝世」された前期古墳副葬鏡が少なからず古墳に副葬されており、器物の保有と生産の関係を考えるうえできわめて興味深い現象といえる。

古墳時代倭鏡にはおおきく3様式に把握できるが、さらなる細分についても様式的な観点から把握しうるとを明らかにした。

すなわち、文様デザインの違いによる系列の設定とそれら系列間の関係から、小様式の

I 群 挽型ぶんまわし成型



II 群 回転台・轆轤成型

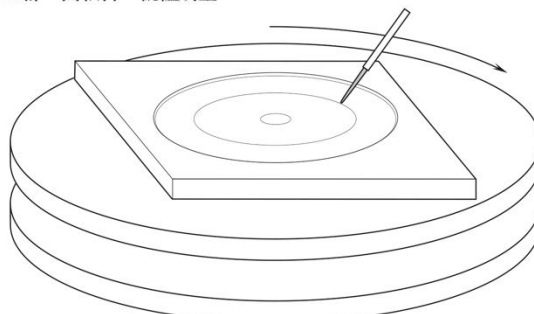


図1 古墳時代倭鏡の鑄型成形技法の大別〔概念図〕

把握を進めた。その結果、まず前期倭鏡には古段階古相、古段階新相、新段階の3つの小様式を設定でき、それらは時期差を反映すると考える。中期倭鏡については、製作技術の異なる大きく二つの製作系統が存在すること、うち一つの系統は前期倭鏡の系譜に連なり、いま一つは別の青銅器の生産から倭鏡生産へ新規参画したことなどを想定できる。後期倭鏡は古段階、新段階古相、新段階新相の3つの小様式からなること、中期倭鏡において新たに倭鏡生産の参画した系統をベースに外来系金工技術者の参画のもとに生産が展開した点、古段階と新段階古相に前期副葬鏡群を「復古再生」する指向性をもつのにたいし、新段階新相は同時期の鏡を模倣する指向性が強いと評価できる。

古墳時代倭鏡で唯一の暦年代資料である癸未年銘人物画像鏡について、癸未年が503年に比定される可能性が高いこと、その時期が須恵器 TK47 型式の時間幅にあることを示した。

これは、後期倭鏡新段階における古相から新相への移行期に癸未年銘人物画像鏡を位置づける点を明らかにしたことによってもたらされた理解である。

後期倭鏡にみる「伝世・長期保有」例から、その保有主体は在地ではなく、倭王権であった可能性が高いことを明らかにした。

相対編年と暦年代の再検討をふまえて、三角縁神獣鏡の製作動向を量産のあり方からとらえなおすことによって、その製作が日本列島における青銅器生産とは隔絶されつつも、倭の需要に明確に対応する形でなされた可能性を指摘した。三角縁神獣鏡の量産技術である「同範」技法と規格共有は、古墳時代倭鏡とは明らかに異なる製作指向性と評価できる。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計16件（うち査読付論文 3件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 岩本崇	4. 巻 六一書房
2. 論文標題 銅鏡・青銅製品	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 前期古墳編年を再考する	6. 最初と最後の頁 19-30
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岩本崇	4. 巻 六一書房
2. 論文標題 副葬品と埴輪による前期古墳広域編年	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 前期古墳編年を再考する	6. 最初と最後の頁 137-148
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岩本崇	4. 巻 六一書房
2. 論文標題 古墳時代前期暦年代の試論	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 前期古墳編年を再考する	6. 最初と最後の頁 301-310
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岩本崇	4. 巻 島根大学法文学部考古学研究室
2. 論文標題 伯耆国分寺古墳に副葬された鏡の履歴	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 伯耆国分寺古墳の研究	6. 最初と最後の頁 45-57
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岩本崇	4. 巻 43
2. 論文標題 古墳時代倭鏡様式論	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 日本考古学	6. 最初と最後の頁 59-78
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岩本崇	4. 巻 64-1
2. 論文標題 再生された四隅突出型墳丘墓	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 考古学研究	6. 最初と最後の頁 18-39
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岩本崇	4. 巻 なし
2. 論文標題 古墳出土巴形銅器の系譜と成立	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 二十一世紀考古学の現在	6. 最初と最後の頁 535 - 545
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岩本崇	4. 巻 なし
2. 論文標題 古墳時代中期における鏡の変遷-倭鏡を中心として	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 中期古墳研究の現状と課題 ~ 広域編年と地域編年の齟齬 ~	6. 最初と最後の頁 9 - 20
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岩本崇	4. 巻 なし
2. 論文標題 旋回式獣像鏡系倭鏡の成立と生産の画期	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 古天神古墳の研究	6. 最初と最後の頁 73-90
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岩本崇	4. 巻 23
2. 論文標題 三味塚古墳に副葬された鏡の特質と意義	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 明治大学博物館研究報告	6. 最初と最後の頁 1-7
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岩本崇	4. 巻 41
2. 論文標題 山陰中期古墳出土鏡雑感	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 中四研だより	6. 最初と最後の頁 5-6
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岩本崇	4. 巻 43
2. 論文標題 古墳時代倭鏡様式論	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 日本考古学	6. 最初と最後の頁 1-20
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岩本崇	4. 巻 -
2. 論文標題 鏡と馬具	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 シンポジウム出雲型石棺式石室の出現を考える	6. 最初と最後の頁 36 - 48
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岩本崇	4. 巻 -
2. 論文標題 古墳時代前期暦年代と副葬品様式の試論	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 前期古墳編年を再考する～地域の画期と社会変動～	6. 最初と最後の頁 49 - 60
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岩本崇	4. 巻 -
2. 論文標題 倭鏡の文様	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 古墳時代美術図鑑	6. 最初と最後の頁 32-35
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岩本崇	4. 巻 34
2. 論文標題 西晋鏡と古墳時代前期の暦年代 島根県古城山古墳の鏡と土器をめぐって	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 島根考古学会誌	6. 最初と最後の頁 1-16
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -



〔学会発表〕 計9件（うち招待講演 4件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 岩本崇
2. 発表標題 伯耆国分寺古墳から出土した鏡
3. 学会等名 シンポジウム伯耆国分寺古墳とその時代
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 岩本崇
2. 発表標題 古墳に副葬された中国鏡の履歴 伯耆国分寺古墳出土鏡群の製作・流入・入手・副葬
3. 学会等名 第34回山陰研究センター山陰研究交流会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 岩本崇
2. 発表標題 鏡
3. 学会等名 『三味塚古墳を考える 中期古墳から後期古墳へ』考古学研究会第45回東京例会シンポジウム（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 岩本崇
2. 発表標題 倭国の形成と伊都国・古代出雲
3. 学会等名 平成29年度伊都国歴史博物館秋季特別展特別講演会（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 岩本崇
2. 発表標題 古墳時代倭鏡の成立と展開
3. 学会等名 平成29年度辰馬考古資料館秋季特別展記念講演会（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 岩本崇
2. 発表標題 古墳時代中期における銅鏡の変遷 倭鏡を中心として
3. 学会等名 中期古墳研究の現状と課題 ～広域編年と地域編年の齟齬～（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 岩本崇
2. 発表標題 鏡と馬具
3. 学会等名 シンポジウム出雲型石棺式石室の出現を考える
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 岩本崇
2. 発表標題 古墳時代前期暦年代と副葬品様式の試論
3. 学会等名 前期古墳編年を再考する～地域の画期と社会変動～
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 岩本崇
2. 発表標題 古墳時代倭鏡様式論
3. 学会等名 第87回古墳時代研究会
4. 発表年 2016年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 岩本崇・小田芳弘・高田健一・磯貝龍志・池淵俊一・上山晶子・南武志	4. 発行年 2019年
2. 出版社 島根大学法文学部考古学研究室	5. 総ページ数 98
3. 書名 伯耆国分寺古墳の研究	

1. 著者名 岩本崇（編）	4. 発行年 2018年
2. 出版社 六一書房	5. 総ページ数 402
3. 書名 前期古墳編年を再考する	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------	---------------------------	-----------------------	----